

一般教育とは何なのか？ ——その教育機能と目的の考察——

瀧 川 一 幸

戦後の大学の歴史を見てみるに、一貫して大学改革が問題となる度に、その重要な問題点の一つとして、一般教育が問題にされて来た。この一般教育に関しての問題（以後一般教育問題と呼ぶ）は、その時々種々な状況と様々な原因があるので一言で述べられるような性質のものではないが、概括して言うならば、一般教育はその機能を果しているのかと言うことであつたと言える。この問題提出は、決して一般教育の目的否定ではなく、機能面が否定的評価を受けているものである。しかし、最近、全国的に教養部改組が各大学で真剣に取りあげられている状況であるが、そのような中で一般教育の機能の否定が目的否定へと移行するような状況がありはしないだろうか？かつて教養部は解体論とか不必要論が述べられた時期があつたが、それが現在の改組の動向と結びついていることは明白である。こうした状況の中で最大の問題は、一般教育の本来の目的が見失なわれはしないだろうかどうかではなからうか？私は従来も現在も一般教育がその機能面で問題があつたことは理解できるが、しかしだからと言って改革運動の中で一般教育の本来の目的が見失なわれることがあってはならないと考えるものである。それ故、ここでは、従来より一般教育の名のもとに不明や無理解や誤解等があつた一般教育をその本来的な教育機能と目的とを考へることによって明らかにしたいと考へる。

上述したような問題状況の中で、一般教育とは何かを明確にすることは重要であるが、ことさらに、日本に於ける一般教育を考へる時、もっと重要な意義もあることも付記しておきたい。と言うのは、日本では、一般教育制度はじめて戦後、新制大学制度として導入された。歴史もない新しいものを重要な制度として導入した時、当然そこには、無理解が生じることは自然である。事実、一般教育問題は従来より問題の根底には、一般教育無理解があつて問題を大きくした経緯や機能悪化の原因になつたのは否定できないであろう。ところ

で、一般にこうした新しいものの導入に伴う無理解は通常どう扱われるかと言うに、「わからないことはしかたない」と言う日本的論理で通ることとなるのである。私もそう考えるであろう。しかし、一般教育問題は、このような「わからないからしかたない」ではすまされない問題であることが、日本の一般教育問題を一層むずかしいものにしたのである。即ち一般教育は、唯たんに新制度として新制大学制度に導入されたのではない。戦争を引き起した旧日本社会体制の中で重要な意味を持っていた旧高等教育制度全般の批判に立って、そして民主主義国家として再生を願う日本の大学改革の重要な柱の一つとして一般教育制度は導入されたのである。それ故、一般教育と民主主義国家として進む日本とは、本来深い意味を持っているものである。それ故に「わからないからしかたない」ではすまない経緯があるのである。今この意味から言っても、一般教育とは何なのか考えてみなおす必要がありそうである。

1. 一般教育とリベラル・アーツ

一般教育とは何なのかを考えて見る場合、その方法は幾つかあるであろう。しかし私は一般教育の原型となったリベラル・アーツを具体例にあげて考える方法が、一つの理解し易いと言う意味での適当な方法であると思う。

さて、リベラル・アーツとは、広辞苑によると、四世紀以降、中世を通じてヨーロッパの学校で施行された人文教育課目の総称で、文法・修辞・論理学・算術・地理・天文・音楽の七科目のことであるとある。今、この七科目を想像してみるに、さしてたいして意味があるとは考えられない。それ故、リベラル・アーツの呼称はその本来的な意味がこの七科目に由来しているのではないであろう。そうではなくて、リベラル・アーツの呼称の本来的な意味は、これらの科目の共通性に由来すると考えられる。と言っても、こうした科目の学問的な範疇が同一性を持っている訳ではないから、残るは、これらの人文教育科目が各学習者に果たした教育機能の同一性を意識した言葉がリベラル・アーツであると考えられる。そう言う訳で、今、これらの科目と当時の学生との関係を想定してみることにしたい。

さて、当時の学生と言うとたいていは、貴族の子弟であったと言うことである。言うまでもないことだが、彼等は、大なり小なりなんらかの人間社会の指

導の立場につく使命を生来的に持っている人々である。それ故、彼等の将来の仕事と言えば、彼等が指導的立場に立って、彼等の実際的な問題を解決することである。例えば、税金・伝染病・その他三面記事の事件解決等が考え得る。このような将来の仕事を持つ彼等、即ち指導的立場に立つ人々の教育を今考える時、さてどのような教育が考えられるだろうか？このような指導的立場に立って、実際的な問題を解決する時、必要なものは、考えられるものは、何か体系的な理論や特殊な事柄に関する専門的知識ではないだろう。むしろ、どんな問題に対処しても、それを広い見地の中で理解し、実際的な状況に適わしい方策を見つけ出し、それを判断する力である。それ故、将来指導的立場につき実際的な問題の解決を仕事とする彼等にとっては、この将来の仕事の遂行に必要な一般的な幅広い見識と実際的な判断力の養成となる教育を必要としたと考えられる。そうして、このような教育目的と合致しているものとして、リベラル・アーツと呼ばれた上記の人文教育科目があったと考えられるのである。それ故、リベラル・アーツの呼称のもとに、人々が意識するのは、通例、物理・化学等の学問範疇より生み出された専門教育の呼称のもとに意識されるピラミッド型の学問体系とは全く異った教育目標と機能である。事実、今このリベラル・アーツの liberal の意味を考えてみると、一般教育の基本的な意味が理解できると考えられる。

liberal を考えてみるのであるが、今、この思考を特性・目的・効果と分けて考えられるから、そのそれぞれを考えてみて、一般教育との連がりを見い出し、一般教育の原型となったそのいわれの意義を明らかにしてみたい。

2. リベラル・アーツの思考の特性

—あるいは一般教育の思考の特性—

リベラル・アーツの liberal の意味を調べてみると、ある定まったものに「とらわれない」と言う意味で自由をあらわしている。この意味を一般的な物を考える思考レベルで考えると、少なくとも「ある特定の考え方」とらわれないと言う意味に解釈されよう。人間が物を考える際、その思考方法は二種類あると考えられる。その一は、ある個々の問題を一つ一つ考えず、それら考え得る問題の総体を対象にして、それら個々問題の中に共通の法則性を見い出し、

それで以って理論化する。このように理論化すれば、いちいち問題を一つ一つ考える必要はないからである。近代科学、特に理数系の学問の思考方法の中には、このような思考方法があるだろう。そしてもう一方の思考方法は、物事を一つ一つ考えてゆくやり方である。そして、liberalな思考方法と言うのは、この後者の考え方である。物事の実際的な解決を念頭に置く場合に、始めから画一的な思考にとらわれず、物事を自由に考えるのである。と言うのも、物事の実際的な解決には、始めから画一的な考え方を取るのは、できない相談であるからだ。即ち、実際的な解決方法は、通常方法が三つも四つもあるのが普通であり、その際、実際的な情況判断とその適合性がその判断規準として求められるのである。

また、実際的な物事の解決の際、その方策が幾つかあれば、そのどれか特定の考え方にとらわれないと言うことは、その方策のどのものも考察開始時に当っては、少くとも公平に見ると言う態度をとる事を意味する。この態度は、ひろく考え方一般として考えてみると平等を意味することにもなる。そして、前述したように、判断規準はあくまでも現実・ないし現実の情況なのである。即ち思考全体から見た時、現実的なのである。以上、まとめてみると、(i)特定の思考にとらわれず、(ii)幾つかの思考方法があれば、それを公平に取り扱う態度、広い意味で平等であり、(iii)判断の規準はあくまでも現実であると言う意味で、現実重視ないし現実的であると言える。

今、この三つにまとめられた思考特性をリベラル・アーツとの関係で見た場合、リベラル・アーツと呼ばれた7つの科目が、このような思考を養成したこと、ひいてはこの七科目の総称リベラル・アーツの教育目的がこの特性を持つ思考と切っても切れない関係と考えられたことは疑いようのないことと思われる。そして、この思考特性を中世から近代へ、そして現代の議会制民主主義体制をとるヨーロッパと言うヨーロッパ史の枠の中で考えてみると、リベラル・アーツが一般教育の原型となったと述べられる時の一般教育の本来的な意義が啓示されると考えられるのである。

私はヨーロッパ史の専門家ではない。しかし、近代ヨーロッパの理念は何だったかと聞かれれば、自由と平等であると答えるだろう。また、議会制民主主

義体制を貫いているものも、その近代の展開から生じたのであろうから、これまた自由と平等であると言えよう。こうした大ざっぱなヨーロッパ史の枠の中ですら、自由と平等の理念の高さが肯定され得るであろうから、そうした理念形成の原型やその原因を探ねる時、リベラル・アーツの思考に出くわすと考えられるのである。ヨーロッパ史の展開の中で次々と変化する体制を受け入れたその思考は、まさしく上述した liberal な思考方法がその中心となったと言って過言ではなからう。また現代では別の意味で問題となっはいるが、それはともあれ、自然科学を発見したその思考方法自体もその母胎となったと言う意味でリベラル・アーツとは無縁ではないであろう。それはともかく、現代西欧で一般教育と言う時、少くとも人々の意識の根底には、このような西欧精神の中心を流れる自由で平等な思考態度をとり、現実的な見方・考え方をとる思考、即ち liberal な思考を養う教育を意味しているのは明白であると言えよう。

ところで逆に、日本で一般教育と言う場合、この「一般」と言う呼称から多大の誤解を生じさせていると言うことがありはしないであろうか？ 前述したように、物事の実際の解決を念頭に置いたこの思考は、当然将来どんなことが起るかあらかじめ設定することができないから、何か特定の対象や特定の対象領域を定めておくことはできない。最近ないし過去に起った人間の経験を例にとりて再考する方法や思考の基礎となる思考訓練をとる方法や芸術や哲学等の学問によって価値判断の能力を養う方法が考えられるに過ぎないのである。そしてこの為にか、一般教育は、専門教育のように、特定の対象や対象領域を持たないのである。しかし、このことの誤解からよく、一般教育は、「わけがわからん」とか、「学問なのであるのか」と言う発言があるのである。学問の目的発想が専門とは全く異ったものなのである。

また、日本には、一般教育を「人間完成」ないし「自己完成」と考える考え方があ。この考え方は、特に一般教育の発足当時強く、現在もこの考え方は強く一般大学人に残っている。この考え方は、一般教育の考え方自体としては、ある程度正しいと言える。しかし充分であるとは、決して言えない考え方であろうと思われる。即ちその理由は、この考え方が一般教育を学生個々人のレベルで考えているからである。学生個々人のレベルで一般教育を考えるの

は、思考レベルとして最低の所なのである。戦後の一般教育の歴史、即ち一般教育形骸化の過程の一原因となっているとも考えることのできることであるが、学生個々人のレベルで一般教育を考えるのは、安易に受け入れ易く、殊に問題が起った時、その責任を学生個々人や教官個々人のレベルで考えておけばそれで済むと責任を不明確にしたり、責任を転化し易い便利な点があるからである。前述した通り、西欧で一般教育と言う場合、なにより先ず国会を中心とする近代国家社会の維持を念頭に置いた発想による教育なのである。例えば民族のルツボである米国の場合、社会のどの面に置いてともあれ指導者層の社会維持に対する共通した思考がなければ、社会の満足すべき発達は考えられないであろう。ヨーロッパに於いても事情は同じなのである。米国では、それ故、一般教育を「よりよい市民育成」の考え方で考える傾向が強い。それ故にこそ、戦後、新しい日本を再建するにあたり、新制大学構想に重大な進言ないし指導をする為にやって来た米国教育使節団の眼には、日本の旧高等教育制度に一般教育制度にあたるものが無った点が特に注目すべきものとして写ったにちがいないのである。民主主義と liberal な思考とは切っても切れない関係については詳しく前述した通りである。それ故、日本が民主主義国家として再出発した時、新制大学の重大な一制度として一般教育制度がどうしても導入されなければならなかったし、またそれを受け入れた時、その受け入れ側の大学人は、「わからんからやむを得ない」ではすまされないものであったのである。しかし、戦前の旧制高校イコール一般教育、戦前の旧制大学イコール専門と言う旧大学観念が一般的に大学人、殊に一般教育に関係しなかった専門関係者に残った事情やそれに基づいた旧制高校を大学が見下した考え方をひきつぐ一般教育に対する専門の蔑視の考え方が残ったこともあって、一般教育は発足時よりきわめて困難な状況の中へ置かれたのである。即ち、「わからないですまない」意義を背おい、無理解と旧大学観の中で、なにがなんでも「わけがわからないからしかたない」ような事情の中で始める立場に置かれたのである。それ故、この期に出た一般教育の運動家の人は幾多の大学論を書き、真剣に「大学とは何ぞ」を研究した人が多いようである。

3. リベラル・アーツの思考目的と対象

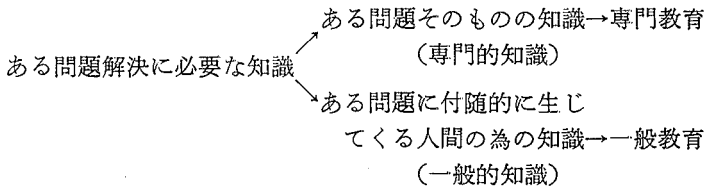
—あるいは一般教育の思考目的と対象—

リベラル・アーツの思考目的を考えると、2. でも少し言及したことなのだが、リベラル・アーツの第二の特性と言うべきものが、明らかにされることと思われる。

それは、リベラル・アーツの思考は、実際的な問題解決を念頭に置く思考養成に教育目的があると考えられた点である。2. の所で、これは、専門教育が特定の対象と対象領域を持つ点と関連して、一般教育は専門教育が持つようには、特定の対象や対象領域を持たないと説明された。事実、リベラル・アーツも一般教育もこの件についてはその通りと言えよう。将来は予測できない。だから、あらかじめ特定のものを設定してもそれは、その設定されたことがその通り起ることはまずないのだから、無意味である。しかし、だからと言って、リベラル・アーツや一般教育には全く対象がないと言えるかと言えば、そうではないのである。対象化に於ける発想が全く異なるだけなのである。この発想の違いによって生じる対象の限定の意味を明らかにする為、具体例をあげることにする。

今 A 地点と B 地点間に道路を建設することが問題となったとする。この場合、この問題解決に当って二種類の知識が必要であると考えられる。その一は、主として土木建設の専門的知識である。この種の専門的知識なしに道路建設は不可能事であることは明白である。しかしそれだけあれば可能かと考えるとやはりまだ不可能である。即ち、その道路建設が自然環境を破壊しはしないかどうかとか、住民にとって公害とはならないかどうかとか、道路の使用にあたっての事故対策はどうするのかとか等の道路建設に付随してくる問題の検討と知識は必要である。この例に於いて、専門と一般を考える時、前者の土木建設等の専門知識を専門教育の担当するもの、後者の道路建設に付随して生じてくる実際的な問題解決に必要な知識を一般教育の担当するものと考えることができる。こうしてこのような二種類の知識が相寄って始めて道路建設は可能と考えられる。さてこの場合、専門としての土木建設の知識の修得の為の教育に、何か具体的な場合を考える必要があるか。そうではなくて、何ら実際の

な具体例を考えずに、あらかじめ道路と言う抽象的な特定な対象と対象領域を限定して、専門的知識を修得できるのである。しかし、他方、一般教育に当るこの道路建設に付随してくる様々な実際の問題の解決の為必要な知識をこの実際の道路建設と切り離して考えることができようか？不可能であると言うより無意味である。実際的な問題の解決に必要な知識や判断力は、それと直面しなければ意味がないのである。この意味から対象はあらかじめ設定できないのである。しかし、それでは対象は全く限定できないのかと言うとそうではない。この例で言えば、私達は経験的な知識として道路建設に付随して生じる問題を例で示したようにパターン化して知っているからである。そして、このことからこの種の問題の性格が理解される。即ち、この例のように、一般教育の問題とは、ある具体的な問題に付随的に生じてくる問題であると言える。そして、なぜ付随的に生じてくるのかを考える時、この問題の根拠が明白にされると思われるのである。上の例で言えば、自然環境破壊にしても住民の公害にして事故対策にしても、それらは「人間として配慮」であると言う共通性が見られるのである。道路だけつくるのなら、土木建設の専門的知識以外は不必要と言えるかも知れない。しかし、その道路は人間の為のものだから、その建設や実際的な使用にあたっての配慮がなされねばならないであろう。以上例をあげた考察の中から、何事でも人間が行う行為は人間の為のものだから、必然的にそこに何らかの人間としての配慮を必要とする問題が付随してくると言えよう。こうして、このことから一般教育の対象は、専門とは全く別の方法で限定されてくるのである。即ち、一般教育とは人間の為の知識であると。今まで述べたものの関係を図示すると次のようになるであろうか。



即ちこのように人間の行動は必然的にある物事そのものの知識とその行動の為に必要な人間の為の知識によって支えられ、始めて行動が可能であると結論できよう。それ故にある物事そのものの知識は、周知のように現代では巨大な

ピラミッドのような世界の体系理論として考えられており、物事の性質そのものによって範疇化されているのである。一方人間の為の知識はそのように人間とは何か大きな謎のようなものであるから範疇化区分化はできないのである。けれども、少なくとも、一般教育の最近の対象としてとりあげられる問題に、公害、人口問題、資源問題等の学際領域があげられる根拠は、この「人間の為の」知識を扱う以上、最も大きな問題となる性質のものであることは明らかであろう。また、従来、一般教育の中心的な科目が哲学や芸術等、人間の最も精緻な価値判断を扱う部門にあると言われる根拠もまたこの「人間の為の」知識と言う面から由来する経緯も理解されることと考えられるのである。そうして、専門教育の知識が人間にとって必要であることは、自明であるが、同時にそれだけで不十分であり、一般教育の扱う知識も同様に必要であり、教育の目標はこの両者の有機的なバランスのとれた修得に理想がおかれるのも、その主旨を考えれば自明のことと思われるのである。ことに、現代社会のように一方で高度に機構化され、専門化され、他方で人間疎外を生み出している社会では、専門と一般との両面の教育は切実に必要事であり、その上、両者は何よりもまずバラバラにあるのでなく、有機的な関連がなくてはならないものであろう。

ところで、一般教育の知識は、実際的问题解決に付随してくる問題、例えば道路建設に付随して起る環境問題や公害問題の解決の為の知識であると述べたが、たしかに専門的知識と異って一般的知識の活用を考えてみる時、「付随的」な性質を持つことは否めない。しかし、上述した通り、この付随性は物事を考察する際のその主体者たる人間の本性から由来することを意味するもので、決して「本質的でない」ことを意味しているのではない。道路建設そのものから言えば、これらの環境問題や公害問題は付随的であるけれど、このこと全体から言えば本質的である。具体例に今道路建設をとりあげたが、例えば、原子力利用に於ける安全問題を考えれば、その意味の大きさがもっと明白となるだろう。ところが、この「付随性」が、専門的立場からのみ見る時、「つけ足」とか、さらには「不必要」と結びつく可能性がある。また、一般教育とは、つけ足であると言う考え方は、今はなくなっているだろうが、旧大学観念の旧制高校を見下す態度と結びつく時、一般教育蔑視となるし、また一般教育の機能の否

定的評価とこの「付随性」が結びつくと、一般教育は不必要であると言う考え方を生じ易い。冒頭の文でも少し言及したことであるが、現在全国的に教養部改組が討議されているところであるが、この意味に於いても一般教育の意義が人間と言う知識の主體的な由来を持つ点を見失なわないように考えられるべきである。

4. リベラル・アーツの教育効果

—あるいは一般教育の教育効果—

リベラル・アーツの教育を今その教育効果の観点から考えてみると当時学生個々人のレベルで考えてみた時、それらがどの程度実際の役にたったかは疑問が生じたかもしれないであろう。例えば前述した七科目と専門と考えられる医学等を比較すればその差は明白であろう。と言うのも専門知識は学生個人にとって生涯を支える程の大きな力を持つものであるから。しかし、一般教育の原型となったリベラル・アーツも長期的に見れば学生個々人の基本的な見方・考え方を支えたと言う意味で大きな意味を持ったにちがいない。そして、思考レベルを社会全体に移す時、一般教育の与える力の大きさは、歴史を動かし得るものであったり、様々な考えを産む母胎となることから言っても真に大きいと言わねばならないであろう。このように一般教育の教育意義をその効果の観点からみる時、少くとも社会全体を念頭に置く思考レベルと、しかも50年100年と言う長期的展望が必ず必要であろう。日本の一般教育の考え方は、こうした点に於いても思考レベルの低さと短期的な視野の狭さが指摘され得る。具体例で述べれば、昭和30年代の一般教育問題は、基礎教育の導入とそれに伴う一般教育の実質的減少であったことがあげられる。この改革の原因は、当時の日本の高度成長とそれに伴う専門的知識の拡大ならびに重視を叫ぶ産業界からの強い要望であった。この善悪を述べることは難しいことであるが、一般教育の立場に立って述べれば、高度成長の後に来たものを指摘すれば充分ではなからうか？即ち公害、エコノミック・アニマル論、自然破壊である。この規模は、例えば公害で言えば、水俣病・サリドマイド児・新幹線公害・日照権等生活の全般に渡る程にひどいものである。教育のその主體的側面の軽視がどんな結果をもたらすか実に痛い経験と教訓とを最近の日本は得たことであろうか？

現在、「福祉」が叫ばれているが、遅いのである。今、日本は様々な面で問題ある状況にあるのである。例えば、資源のない日本が今のような将来展望を持っているのを考えるだけでもその困難な点が理解できるであろう。工業輸出国として日本が将来を考えるなら、ますます各分野の専門的知識は必要とされることは明白である。しかし、それと同時に日本の将来を左右するのは、大学でどのような一般教育をするかにかかっているとすら言って良い程、一般教育の本来的な目的意義が大きいことは、どれ程大きな声で言っても言いすぎではないであろう。

5. 結 論

今日の一般教育は多くの問題をかかえている。事実、一般教育の意義の誤解を考えるだけでも、その問題は大きいと言える。前述したことでもあるが、一般教育の本来的意義から言っても一般教育は是非とも専門教育とともに必要であり、また専門教育もこの一般教育が満足に行なわれて始めて十全の意味を持つものである。しかし、戦後の一般教育史を見るに、一般教育に理解がなければならぬ人々、行政当局者や専門担当者の満足のゆくような理解は少なかったと言えるように思うのである。そして、少くともそれがたえず一般教育問題の一因となったと考えられるのである。私は決して一般教育問題の専門家ではない。最近、研究室委員となり、にわか一般教育の歴史を調べたものに過ぎない。それ故、この小文にも幾多の誤解があることとは思う。しかし、少くとも、一般教育を前述したように考えることを通して、今まではほとんど気のつかなかった一般教育の持つ本来的な意義の大きさに気がついた者である。現実の一般教育は語るは易し行うは難しの類のものであることを知りつつ、それにもかかわらず、この一文を書いたのは、一般教育は少しでも多くの理解がなければならぬし、そのことが一般教育の改革につながると信ずるからである。